

【要約】平成26年度 近江八幡市普通会計財務書類4表

現在の自治体会計は、現金主義にてなじみやすい反面、市が投資してきた資産、借入金といったストック情報、行政サービス提供のために発生したコスト情報については不十分です。企業会計の手法により、それを補完するのが、「新地方公会計制度」の財務書類4表です。

新地方公会計制度の概要

新地方公会計制度とは、国が示した「基準モデル」と「総務省方式改訂モデル」の二つの作成方法を参考に、普通会計だけでなく特別会計や関係団体まで含めた連結ベースの財務書類4表を作成および分析し、公表することです。

本市の取組

・総務省方式改訂モデルの採用
多くの自治体が採用しているため、団体間比較が可能です。また、資産評価に決算統計データを使用しているため、取り組みやすい反面、精度に欠けることが指摘されています。そのため、本市においては有形固定資産のうち、土地については土地台帳の評価額を積み上げており、償却資産についても来年度以降の資産台帳の評価額の反映に取り組みます。

普通会計財務書類の概要

大型投資的事業の実施などにより、有形固定資産は増加したものの、公共施設等整備基金の活用などにより資産全体としては約2億円の減少となり、また負債においては、大型投資的事業の財源に地方債を活用している影響など約7億円の増加となりました。資産合計と負債合計の差引が純資産となるため、純資産として約9億円の減少となりました。今後も大型事業が継続する予定であると同時に、少子高齢化による社会保障関係経費増加により経常行政コストも増加する見込みであるため、将来的な資産と負債とのバランスを検証しながら施策を展開することが重要となります。また、総務省から地方公共団体へ要請がある統一な基準による財務書類作成に向けた取り組みを具体的に進めていきます。

貸借対照表

年度末において、市が住民サービスを提供するために保有している財産をどのような財源で賄ってきたかを対照表示したものです。

資産	1,604億円 (対前年度 △1億円)	負債	295億円 (対前年度 +7億円)
市が所有している財産で、行政サービスの提供能力を示します。		地方債や将来の職員の退職金など、将来世代の負担で返済する債務です。	
(内訳)			
1.公共資産	1,405億円		
(道路、学校、庁舎など)			
2.投資等	93億円		
(基金、出資金など)			
3.流動資産	106億円		
(現預金、財政調整基金、未収金など)			
うち、歳計現金	21億円		
		純資産	1,309億円 (対前年度 △9億円)
		現世代が既に負担して、支払が済んでいる資産です。	

★市民一人当たりになると、

資産 195万円(対前年度△1千円)

負債 35万9千円(対前年度+9千円)

経常行政コスト

32万3千円

(対前年度+1万6千円)

資金収支計算書

1年間の現金の収支の流れを三つの活動区分に表示したものです。

期首資金残高
11億円

当期収支(26.4.1～27.3.31)
10億円

(内訳)

1.経常的収支 58億円

2.公共資産整備収支 △13億円

3.投資・財務的収支 △35億円

期末資金残高
21億円

純資産変動計算書

純資産が1年間にどのように増減したかを示します。

期首純資産残高
1,317億円

当期変動高(26.4.1～27.3.31)
△8億円

(内訳)

1.純経常行政コスト △253億円

2.財源調達(地方税等) 244億円

3.その他 1億円

期末純資産残高
1,309億円

行政コスト計算書

1年間の行政活動のうち、福祉や教育などにおける人的サービスや給付サービスの提供など、資産形成につながらない行政サービスの経費と、サービスの直接対価として得た受益者負担金を財源として対比させたものです。

経常行政コスト(A)
265億円

(内訳)

1.人にかかるコスト 42億円

(職員給与、退職手当など)

2.物にかかるコスト 82億円

(物品購入、光熱水費、修繕費、減価償却費など)

3.移転支出的なコスト 138億円

(社会保障給付、補助金など)

4.その他のコスト 3億円

(地方債の利子など)

経常収益(B) 12億円

行政サービスの利用で市民が直接負担する施設使用料や手数料などです。

純経常コスト(A)ー(B)
253億円

経常行政コストから経常収益を差し引いた純粋な行政コストです。純資産変動計算書の財源調達で賄われます。

【要約】平成26年度 近江八幡市連結財務書類4表

市では普通会計の事業のほかにも、病院や上下水道事業、医療保険事業などを実施しています。市の直接事業とは別に一部事務組合や公益法人を通じて実施する事業もあります。連結財務書類によって、市グループ全体像の財政状況を把握できます。なお、連結の際には、連結対象団体間の取引は内部取引として相殺消去しています。

※連結における注意事項

一部事務組合・広域連合は、負担割合などに応じて按分しています。
第3セクターなどは、出資比率50%以上の団体を対象として連結しています。

連結財務書類の概要

連結財務書類は、負債割合が普通会計と比べて大きくなります。これは公営企業（上下水道、病院）事業などが資産整備の財源調達に地方債を活用していることが要因です。

平成26年度は、資産が公営企業会計制度の見直しによりみなし償却が廃止されたことなどにより減少、負債が普通会計における資産整備の影響や地方公営企業会計制度の見直しによる長期前受金の計上などにより増加したことにより、純資産としては40億円減少しました。各会計・団体単体だけでなく、市全体を見通した将来的な資産と負債とのバランスを検証しながら施策を展開することが重要となります。

連結貸借対照表

年度末において、各会計および団体を一つの行政サービスの実施体とみなし、連結ベースでの資産や負債の情報を一覧的に示します。

資産	2,344億円
(対前年度 △12億円)	
連結ベースの所有している財産です。	
(内訳)	
1.公共資産	2,065億円
(道路、学校、病院、上下水道など)	
2.投資等	82億円
(基金、出資金など)	
3.流動資産	197億円
(現預金、財政調整基金、未収金など)	
うち、資金	172億円
4.繰延勘定	0億円

負債	808億円
(対前年度 +28億円)	
連結することで、下水道事業、病院事業、水道事業などの地方債が加わっています。	
純資産	1,536億円
(対前年度 △40億円)	
現世代が既に負担して、支払が済んでいる資産です。	

連結資金収支計算書

連結ベースの1年間の収支の流れを三つの活動区分に表示したものです。

期首資金残高	148億円
当期収支(26.4.1～27.3.31)	24億円
(内訳)	
1.経常的収支	80億円
2.公共資産整備収支	△17億円
3.投資・財務的収支	△39億円

期末資金残高	172億円
---------------	--------------

連結純資産変動計算書

連結ベースの純資産が1年間にどのように増減したかを示します。

期首純資産残高	1,576億円
当期変動高(26.4.1～27.3.31)	△40億円
(内訳)	
1.純経常行政コスト	△325億円
2.財源調達(地方税等)	339億円
3.その他	△54億円

期末純資産残高	1,536億円
----------------	----------------

連結行政コスト計算書

行政コスト計算書の作成基準を連結対象の特別会計や団体に適用し、一つの行政サービスとみなして作成したものです。

特別会計において保険医療会計の金額が大きいため、移転的支出コストの割合が高くなります。また、特別会計は受益者負担の原則にあるため、経常収益が大きくなります。

経常行政コスト(A)	600億円
(対前年度 +18億円)	
(内訳)	
1.人にかかるコスト	110億円
(職員給与、退職手当など)	
2.物にかかるコスト	176億円
(物品購入、光熱水費、修繕費、減価償却費など)	
3.移転支出的なコスト	295億円
(社会保障給付、補助金など)	
4.その他のコスト	19億円
(地方債の利子など)	

経常収益(B)	275億円
(対前年度 +5億円)	
施設使用料や手数料などのほか、病院医療費、保険料、上下水道料金が含まれます。	

純経常行政コスト(A)－(B)	325億円
(対前年度 +13億円)	
経常行政コストから経常収益を差し引いた純粋な行政コストです。純資産変動計算書の財源調達で賄われます。	

★市民一人当たりになると、

資産	285万円	(対前年度 △1万4千円)
負債	98万2千円	(対前年度 +3万4千円)
経常行政コスト	73万円	(対前年度 +2万3千円)

【最後に】

公会計制度は7年を経過していますが、現状は財務書類を作成し情報開示のみとなっています。資産債務改革をはじめとした行財政改革のツールとして活用ができています。自治体は全国でも少数です。今後、より活用できる統一的な基準による作成を国から要請があるため、一歩進んだ公会計の取組を進める必要があります。